

第 I 部

石川 馨先生とのお別れ

第1章

しめやかに故石川 馨先生の 葬儀執り行われる

石川 馨先生は、1989年4月16日、午前7時56分脳出血のため調布市東山病院で逝去されました。享年73歳でした。

石川先生は、1988年1月に築地の聖路加国際病院に入院され大腸ポリープ摘出のための手術を受けられました。1年間ほど入退院を繰り返しておられましたが、1989年1月23日にホテルオークラで行われた先生の勲二等瑞宝章叙勲のパーティーにはお元気なお姿をお見せになり、お祝いにかけてつけた参会者一同ほっとしたところでありました。その後は、徐々に回復されているように見受けられ、各種会合等にも出席されておられました。

4月13日に突然ご自宅で倒れられ、ご家族の献身的なご看病のかいもなく意識を回復されぬまま遂に不帰の客とされました。まことに痛恨の極みでありました。

通夜は4月18日、密葬は19日に調布市飛田給のご自宅において執り行われました。また、本葬は、4月24日に芝の増上寺大殿において、武蔵工業大学ならびに財団法人日本科学技術連盟の合同葬としてしめやかなうちにも盛大に執り行われました。当日は、午前11時30分に喪主の長男 忠氏に抱かれたご遺霊が式場に到着、武蔵工業大学吹奏楽部の演奏するラベルの葬送曲「亡き王女のためのパヴァーヌ」に迎えられ、葬儀参列者の堵列の中、斎場に入られました。

葬儀は、産業界、学協会、大学関係者約400名の列席のもとに執り行われ、最初に葬儀実行委員代表の古浜庄一武蔵工業大学学長代行、鈴江康平日科技連

理事長の弔辞、ついで友人代表の元東京大学総長向坊 隆氏、小松製作所会長河合良一氏の弔辞、最後に学生を代表して晴沢弘人君の弔辞が捧げられました。また、国内外から 1500 通を超える弔電が寄せられその一部が拝読され、指名焼香につづく告別式には、折りからの雨模様の中、学生を含めて約 3000 名の弔問者が訪れ午後 3 時頃まで焼香の列が絶えませんでした。

弔電拝読

国内はもとより海外からも、20 カ国から先生の死をいたむ多数の弔電が届きました。大変著名な方から現場の方にいたるまで多くの方々からいただきました。ここに、そのいくつかについて要点のみをご紹介します。

“石川博士がご逝去されたことを知り深い悲しみにくれております。博士は私の良き友人であり、博士の死は世界にとって重大な損失です。” (W. E. デミング)

“石川教授は、品質に対する偉大な世界的貢献をなされました。私達すべてが石川教授のこの世からの出立を深く悲しんでおります。” (J. M. ジュラン)

“石川学長は、遠大なビジョンを持った卓越した技術者でありました。学長のビジョンは武蔵工業大学に生き続け、また、オレゴン工科大学の将来の一部分ともなるでしょう。” (オレゴン工科大学ブレイク学長)

“先生は中国人民の古くからの友人であり、長年中国での品質管理の普及のために、多くの有益な仕事をなされてきました。我々は先生のことを、いつまでも忘れることができません。” (中国駐日特命全権大使 ヨウ シンア)

“QC 界の世界超一流指導者石川 馨先生のご逝去の報に接し、これまでの当支部へのご指導に感謝し、謹んでお悔やみ申し上げます。” (QC サークル支部)

“先生の長年のご厚情にお報いすべく、再スタートをきったところでした。先生のご教訓を生かし、世界のため社員のため努力を続けることをお約束いたします。” (中小企業の社長)

“初めて葉書差し上げます。日本の企業の品質向上になくてはならない人を失いました。今後一層の努力をし、世界のトップレベルになることが、先生に対して報いることだと思います。残念です。残念です。”

(ある電機メーカーの現場の方からご長男 忠さん宛の葉書)

弔 辞

武蔵工業大学

学長代行 古 浜 庄 一

衷心より今は亡き学長石川 馨先生のご霊前に、武蔵工業大学を代表してお別れの言葉を申し上げます。

先生には私共大学全員のあつい願いもむなしく、平成元年4月16日帰らぬ客となられ、余りにも突然のご逝去に私共は偉大な指導者を失い、戸惑いと深い悲しみにつつまれております。またご遺族の皆様のお嘆きはいかばかりかのご推察申し上げます。

かえりみますと、先生は昭和14年東京帝国大学工学部応用化学科をご卒業、第二次大戦中は海軍造兵将校として参加され、その後東京大学の教授として約30年間、教育、研究に立派な業績をあげられ、名誉教授とされました。続いて昭和53年、私共の武蔵工業大学は石川 馨先生を学長にお迎えし11年間にわたりご指導を受けました。

その間先生は本学60年の伝統を支える建学の精神、公正、自由、自治の実践のため、大学の組織改革、教育研究の活性化、国際化への対応などに心血を注がれ、本学発展の基礎を築かれました。

このような先生の教育、研究および産業界への国内および国際的な輝かしい業績によって昭和63年には勲二等瑞宝章を受章され、今回は正四位に叙せられました。

しかし、先生の高邁な大事業は完成半ばにして今日のご不幸に遭遇し、偉大な指導者を失ってしまいました。実は、先生はお亡くなりになる数日前に学内の会合に予告なしに突然見えられ、ビールを所望され、一口召し上がられました。その翌日の早朝、意識を喪失されましたので、このときのビールがご酒豪

の最後の一杯となりました。

またその日、予定を変更されてわざわざ大学に立寄られたことは、先生は今日の天寿に対する何らかのインスピレーションを受けられて11年間愛情を注いでこられた本学への最後のお別れのためと、また私共に「俺の後をしっかりとやれよ」と無言のご教示をされるためであったかのように思えてなりません。私共教職員一同は先生のご遺志を受け継ぎ、その一層の発展に力を合わせて邁進することをご霊前にお誓い申します。いつまでも私共をお見守り下さい。

謹んで石川 馨先生のご冥福をお祈りし、告別の辞とさせていただきます。

弔 辞

財団法人 日本科学技術連盟

理事長 鈴 江 康 平

謹んで財団法人日本科学技術連盟理事 石川 馨先生の霊に追悼の辞を申し述べます。

石川 馨先生は終戦後間もなく、統計的品質管理の考え方が米国から導入された際、わが国産業の復興に品質管理の果たす役割が極めて大きいことを痛感され、以来その研究に没頭されました。

先生は専門家だけが行う米国式の品質管理は、わが国の産業風土の中では効果が少なく、経営者から現場第一線の作業者にいたる全員参加の品質管理が、ぜひ必要であることを提唱され、またその一貫として作業者の人々を中心としたQCサークル活動を創案、指導され、それらの実現と普及に努力されました。これらのわが国における全社的品質管理活動およびQCサークル活動は、その後産業界において広く発展し、今日では世界各国の模範となっており、またQCサークル活動は海外50数カ国で実施されるにいたっております。

一方、先生の国際的な活動としては約30年間に33カ国を訪問され、品質管理の調査、交流、指導等に大きな足跡を残され、また国際品質管理大会、国際QCサークル大会等を企画し、強力で推進されて世界で初めての国際会議の実現を図られました。

このように常々品質管理活動の中心的存在であられた先生を突如として失いますことは、誠に痛恨の極みであり、邦家のためにも大きな損失であります。日本科学技術連盟といたしましては、先生の指導による諸事業を一層発展させますことをお誓いいたし、お悔やみの言葉といたします。

弔 辞

東 京 大 学
元総長 向 坊 隆

故 石川 馨君にお別れの言葉を述べます。

思い起せば君とは学生時代から 53 年にわたり親しく願ったことになり、同窓生の中でも最も元気であった君が、昨年来、健康を損ねている由をもれ聞き、最近は何れも会う機会もないので、心配していました。

しかし、1 月 23 日、君が勲二等を授与されたお祝いの会に元気な顔を見せられ、安心したのですが、それが君と会う最後の機会となってしまいました。

大学での私達のクラスはまとまりがよく、全体として極めて親しくして来ましたが、特に君とは大学最後の 1 年間、同じ教授の下で卒業研究を行い、しかも同じ部屋で過ごしたので一層親しい仲となりました。私達の学生時代は、恐らく戦前では自由に勉強や生活を楽しむことの出来た最後の頃であったと思います。研究も楽しかったし、休みには暇を惜しんで旅行やスキーに出かけたことが懐しく思い出されます。

戦後に君が大学に戻ってからの研究に基づいた品質管理の面における君の業績は目覚ましいもので、よく知られる通りであります。

わが国は産学協同が不充分であるとよく言われますが、君の場合には、大学での研究が直接産業界に大きな貢献をもたらしたわが国では珍しい典型的な例であるといえましょう。

学生時代から極めて元気で何事にも積極的だった君は、研究や産業界への貢献にも実に精力的に努力されました。今回忽然として世を去ったのは、恐らく、長年の精力的な活動の疲れが一旦に君を襲ったのでしょう。まだまだ活躍して貰いたかったのにと誠に残念であります。本人は、やるだけのことは精一杯

やったと、思い残すことはなかったのだろうと思います。

馨君は、海軍技術将校をしていた時に覚えたのでしょう。親しい友人に対してはよく「貴様」と呼びかけました。恐らく家庭でも子供さんに対しては同様だったのではないかと想像していました。

最後に倒れられた時も、子どもさん達に対して「貴様達、お母さんを宜しく頼む」とつぶやいたのではないのでしょうか。しかし、馨君、奥様をはじめ、子供達も皆元気だ。心配することはない。安らかに眠りたまえ。忙しく過ごして来た人生だったのだから、ゆっくり安らかに眠りたまえ。さようなら。

弔 辞

株式会社 小松製作所

取締役会長 河 合 良 一

本日、ここに故石川 馨先生の告別式に当り友人の一人としてご霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

去る1月末、先生のご叙勲を記念する会でお祝いの言葉を申し上げました時は、瘦せておられましたものの気力充分なご様子を拝見し、一日も早いご本復を念じておりました。それが今日こうしてお別れの言葉を申し上げることになり、誠にづらい思いでございます。ご家族はじめご親族の皆様方、更に先生にご指導をいただいた方々のお悲しみは如何ばかりかと深くお察し申し上げます。顧みますと学生時代、先生は理科、私は文科でしたが、学校のテニス部で練習を始めて以来の長いお付き合いをさせていただきました。

それもただお付き合いを頂いたのではなく、心からなるご指導を頂きました。既に30年近い昔のことになりますが、当社は初めて国際的な自由競争の波にさらされて、まさに浮沈の際に立たされました。私は先生のところに参上いたしまして、先生のご指導を無理にお願いし、そして全社一丸となって会社の製品品質の向上、会社の運営の刷新に努力し、何とか自由化を乗り切ると共に、その後の会社発展の基礎を築くことが出来ました。若しもあの時、先生の品質管理との出会いがなかったら、若しも先生のご指導をいただけなかったら、と考えますと、当社は本当に先生に救われたなあとという深い思いが、いま改めていたしております。先生のご指導は、誠に素晴らしいものでした。

ご指導に当っては、何時も静かに客観的に説かれたので、誰もが心から納得して改善活動に取り組んだものです。会社の体制が国際化に向けてまだまだ準備不足であると、時には厳しく指摘され、愕然とした事も一再ならずありまし

たが、その一方で「努力によっては充分見込みがある」とそれとなく私共の耳に入るように話され、それが実に嬉しい励ましとなったものです。先生からは多くの事を学ばせて頂きましたが、加えてご指導の中で先生のお人柄に触れる機会が沢山ありました事など、感謝と共に懐しい思い出となりました。

今更私から先生のご業績について申し上げる必要はありませんが、私共産業人としては、日本の産業界で今日の地歩を堅めたのも先生の全社品質管理とQCサークル活動が会社経営の基本にあったからだと信じております。産業界に深い愛情を抱き、情熱を持ってお導き下さいました先生が、今逝かれました。誠に痛恨のきわみであります。

石川先生、長い間、本当に有難うございました。友人の一人として、ここに改めて心からご冥福をお祈り申し上げます。

弔 辞

武蔵工業大学学生団体連合会

執行委員長 晴 沢 弘 人

私たちの敬愛する学長石川 馨先生のご霊前に、武蔵工業大学の全学生を代表して、謹んで告別の辞を申し述べさせていただきます。

石川 馨先生は、昨年来のご病気もご快癒され、在学生一同安堵していた矢先、平成元年4月16日、私たちの願いもむなしく永眠されました。あまりにも突然の訃報に接し、私たち学生は尊敬する学問の指導者を失い、深い悲しみを禁じ得ません。

先生は昭和53年、武蔵工業大学長にご就任され、爾来「公正、自由、自治」という伝統あるわが建学の精神を教育の場で実践してこられました。

先生はまた、私たちを教え導びかれる際に「国際人としてのセンスの修養に努めるべきこと」「協調性と責任感をもった人間を目ざすべきこと」、そして「21世紀の日本及び世界の科学技術を担う人間を目ざすべきこと」という我等若者の目ざすべき三つの道標を提示してこられました。

先生は学生に対して常に優しい眼ざしと温い御心で接して導いて下さいました。

全社品質管理の世界的権威として、大学はもとより世界各国にその理念と応用技術の普及に情熱を注いでこられました。私たちは石川 馨先生にご高導賜りましたことを終生の誇と存ずる次第でございます。

今ここに永久のお別れを申し上げねばならないことは残念でなりません。先生が提示された至高の道標と精神とを我等は受け継ぎ、今後、全力を尽くして学業に精励し、以って石川 馨先生の御心を具現してゆく決意であります。

先生のご冥福を衷心よりお祈り致し、謹んで告別の辞とさせていただきます。